

文化的資源と創作活動によるまちづくりの高度化に関する研究

兵庫県立大学経営学部非常勤講師 田代 洋久
兵庫県阪神南県民センター県民交流室

1 研究の背景と目的

近年、歴史、文化、自然、農産物など地域固有の資源を発掘・活用し、その魅力を高めることで、地域活性化を図ろうとする取り組みが注目されている。かかる手法は地域の実情に応じた創意工夫が行えるため広く実施され、多彩な取り組みがなされている。一方、地域間競争の激化に伴い、単に地域資源を活用するだけでは容易に他地域に模倣されてしまい、持続的な活性化効果は得られない。そこで、地域資源の活用方法を高度化し、魅力や価値を高め、他地域に模倣されにくい比較優位を獲得する必要がある。加えて、持続可能な社会の形成を図るには、経済、社会、文化、教育など地域社会の総合的な活性化を考慮する必要がある。

地域資源活用の高度化には様々なアプローチが可能であるが、町並み・景観など地域性と結びつく文化的資源にマッチした創作活動を組み合わせることで地域の魅力を高めることも有効な方法のひとつである。かかるまちづくりを実践している地域として、岡山県真庭市勝山町並み保存地区がある。

本研究は、内部資源の再編成によって価値を創出する資源ベースアプローチをまちづくりに援用し、文化的資源と創作活動を組み合わせた地域活性化に関する理論的検討を行う。次に、岡山県真庭市勝山町並み保存地区の公民協働によるまちづくりの発展過程を「のれんのまちづくり」「勝山のお雛まつり」という創作活動を伴う2つのまちづくり活動にフォーカスしながら検証する。さらに、文化的資源と創作活動を組み合わせた勝山のまちづくりの特質と多元的效果について考察を行うことを目的とする。

事例選定の理由は、①街道沿いに家屋が連なるコンパクトな空間構造を持っており、地域分析が容易であること、②文化的資源と創作活動を組み合わせた公民協働型まちづくりを実施していること、③各方面からまちづくりに関する受賞を得ており、社会的評価が得られていることによる。

2 既往研究と本研究の位置づけ

景観形成にかかる研究は多くの報告があるが、歴史的建造物による町並み形成や住民意識に関する研究として、歴史的町並みを活かしたまちづくりプロセスや合意形成に関するもの¹⁾、歴史的建築の保存活用に関する市民の評価意識に関するもの²⁾などの研究蓄積がある。観光まちづくりに関する論考では、町並み景観を観光資源として位置づけ、アンケート調査等によって景観設計に関する課題や発展過程を論じたもの³⁾がある。また、創作活動を活用したまちづくりの研究には、「大地の芸術祭」の開催に伴う住民意識の変化に関するもの⁴⁾や、地域に根ざした多主体型アートプロジェクトが市民や地域に与える影響の検討を行ったもの⁵⁾がある。

地域の競争力や地域空間の価値創出といった本研究に近い論考として、企業が行っているマーケティング手法をベースとした地域マーケティング手法の有効性を論じたもの⁶⁾、テーマ型まちづくりで創出された創作的景観に関する住民評価を論じたもの⁷⁾がある。

本研究は、地域活性化への新しい視座として、①資源ベースアプローチのまちづくりへの援用の有効性、②文化的資源と創作活動を組み合わせによる地域の魅力向上、③住民や事業者、行政の連携による多元的效果の創出について総合的に論じたところに独自性がある。

3 地域資源の戦略的活用によるまちづくりの高度化

3-1 資源ベースアプローチ理論

地域資源を活用した地域活性化は、多くの地域で実践されているが、他地域の成功事例の模倣や話題性を追求した安易な取り組みでは、活性化効果の持続は困難と言わざるを得ない。金井(2009)が「従来の地域活性化の方法には戦略的視点が全く見られず画一化現象が見られる。各地域の独自の資源を有効に活用した活性化戦略を策定することが肝要」と指摘しているとおり、地域資源の活用には戦略的マネジメントが必要となる。地域資源の戦略的活用のヒントとなる理論として、経営戦略論における資源ベースアプローチがある。

青島・加藤(2003)は、資源ベースアプローチは、「企業業績の差異の源泉を企業内部の経営資源に求め、独自性の高い経営資源に注目し、市場からは簡単に調達できない固定的資源であるストック的要素を重視する」ものとしている。Collis&Montgomery(1998)は、「価値ある資源を認識し(identify)、構築し(build)、配置する(deploy)ことは、企業戦略と事業戦略の両方において重要である。」と指摘した。さらに、Barney(2002)は、企業の内部資源が持続的競争優位を確保するための条件として、①V(価値の創出)、②R(希少性)、③I(模倣困難性)、④O(戦略遂行組織)からなる実践的なVRIOフレームワークを提案している。

このように、資源ベースアプローチでは、企業の内部資源、組織の能力、継続的な独自性といった要素に注目が置かれており、地域資源の活用による地域活性化に援用した場合、大きな示唆を与える。

3-2 組み合わせによる付加価値の創出

次に地域資源の再構築や高度化をどのようにして実現するかが問題となるが、本研究では新しい組み合わせによる可能性に注目する。組み合わせによる価値向上に関する理論として、Schumpeter. J. A のイノベーション論が知られる。Schumpeter は、新結合が非連続的に現れたものがイノベー

ションであると定義しているが、「単なる寄せ集め」では有効性は低く、各要素が「有機的に統合する」（白石(2005)）ことが必要である。

こうした考え方にに基づき、近年の地域資源の活用は、地域に所在する資源の再編成を通じた高度化傾向が見られている。例えば、文部科学省、農林水産省、国土交通省の共管によって制定された歴史まちづくり法は、ハード事業とソフト事業あるいは分野間の組み合わせによって歴史的風致の維持向上を総合的に図るといった複合的な性格を持っている。歴史的建造物による景観形成や創作活動は、単独でもまちづくりを果たせるが、2つの要素を組み合わせることでいっそう魅力あるまちづくりが行える可能性がある。

4 真庭市勝山町並み保存地区のまちづくりの展開

4-1 事例地の概要

真庭市は、岡山県北部、中国山地のほぼ中央に位置し、東西約30km南北約50kmで面積は828km²である。平成17年3月に旭川の上流部5町4村が合併して誕生し、人口48,964人、高齢化率33.6%（2010年国勢調査）である。真庭市南西部に位置する勝山地区は、旧勝山藩2万3万石の城下町として栄えた地域で、白壁の民家や高瀬舟の発着場など歴史的建造物や文化的な景観が残っている。

こうした地域特性を背景に、1985年12月に岡山県から町並み保存地区の指定を受け、歴史的建造物の保存・修復に着手した。当初はハード事業を中心に実施されたが、その後、ソフト事業に重心をシフトし、町並み保存地区内の歴史性のある民家や商家等を中心に、デザイン性の高い草木染めによるのれんを面的に配置することによる景観形成や、住民が創作した雛人形や独創的な展示による雛祭りイベントの開催を行い、魅力を高めている。

現在の補助事業対象地域は、県指定の町並み保存地区重点整備地区を核に2次の拡大を経て、商家と民家が建ち並ぶ南北約1kmの街道沿いの空間で、南端の新町は東西方向に連なる新町商店街を経てJR勝山中央駅に接続している（表-1、図-1）。さらに、2004年度から2008年度にかけて実施されたまちづくり交付金事業によって空間整備を拡充し、歴史的醤油蔵を改装した勝山文化往来館「匠蔵」を拠

点にアート事業を展開している。勝山地区では文化性に注目したまちづくりを推進した結果、多くの観光客が訪れるようになったほか、数々のまちづくり関連の表彰を受けている。

表-1 (左) 町並み保存地区の拡大

地区名	指定時期	内容
城内北	2005年10月	第二次指定拡大
城内南	1997年4月	第一次指定拡大
山本町	1985年12月	重点整備地区指定
上町	1985年12月	重点整備地区指定
中町	1985年12月	重点整備地区指定
下町	1997年4月	第一次指定拡大
中川町	1997年4月	第一次指定拡大
新町	1997年4月	第一次指定拡大



図-1 (右) 町並み保存地区（補助対象地域）

4-2 まちづくりの変遷と特徴^②

1985年度以降の勝山地区のまちづくりは、大別して3期に分けられ、各々の時期でまちづくりの特徴は異なっている（表-2）。第1期は、歴史的文化的資源の保存、修復を端緒とした町並み保存事業の始動期にあたる。勝山地区では2次にわたって岡山県町並み保存地区整備事業が実施され、民家修復や施設・駐車場整備等の空間整備を中心とするハード事業が実施された。

第2期は、公民協働によるソフト事業展開を特徴とする。ソフト事業の中核は、創作活動を伴う2つのまちづくり活動である。一つは、「のれんのまちづくり」と呼ばれるまちづくり活動で、発注者の暮らしや想いを一軒づつデザイン化したのれんを地域住民が協調して掲げることで美しい町並み景観を形成するものである。

もう一つは、「勝山のお雛まつり」と呼ばれるイベントで、各家が保有する雛人形を展示するだけでなく、地域住民自らの創意と工夫によって新たに雛を創作したり、玄関先に竹細工や花を添え、保有する着物や工芸品の飾り付けを行うもので、町中が美しい生活展示空間と変容し、高い社会的評価を得ている。

第3期は、アートによるまちづくりの展開で、まちづくり交付金事業による生活環境空間整備と勝山文化往来館「ひしお」の設置運営で、国内外のアーティストを招聘し

表-2 勝山地区のまちづくりの展開^①

	第1期	第2期	第3期
期間(年度)	1985～1995	1996～2003	2004～
自治体	勝山町	勝山町	真庭市
特徴	町並み保存事業(ハード事業)	公民協働によるソフト事業	アートによるまちづくり
主要ハード事業	郷土資料館の整備 民家・商家の修復 等	民家・商家の修復	電線地中化、道路美化、 勝山文化往来館の整備 等
主要ソフト事業		のれんのまちづくり(1996～) 勝山のお雛まつり(1998～)	展覧会・ワークショップ・アートイベントの開催
住民まちづくり団体	21世紀の真庭塾(1993～)	町並み保存事業を応援する会(1996～) 勝山のお雛まつり実行委員会(1998～)	NPO法人勝山・町並み委員会(2005～)
社会的評価		岡山県民文化大賞受賞(2002) 地域づくり総務大臣表彰(2002)	「優秀観光地づくり賞」受賞(2004) 第42回SDA特別賞(2008) 都市景観大賞「美しいまちなみ賞」(2009)

た創作・展示、アートワークショップ、写真展など主として文化芸術の展示、活動の場として利用されている。

町並み保存事業関連事業費の推移をハード要素とソフト要素に分割して示したのが表-3である。

表-3 町並み保存地区事業費構成⁽¹⁾

年度	(単位: 百万円)			計
	第1期 1985 - 1995	第2期 1996 - 2003	第3期 2004 - 2012	
ハード事業費	175	100	873	1,148
構成比(%)	(13.6)	(7.9)	(69.3)	(91.1)
ソフト事業費	0	10	102	112
構成比(%)	(0.0)	(0.8)	(8.1)	(8.9)
のれん制作 事業費補助	0.0	4.3	3.9	8.2
構成比(%)	(0.0)	(0.3)	(0.3)	(0.7)
計	175	110	975	1,260
構成比(%)	(13.9)	(8.7)	(77.4)	(100.0)

ハード事業費とは、町並み保存地区整備事業の総額からソフト事業費を除いたもので、資料館等の施設整備、町並み保存整備、駐車場整備にかかる費用を含んでいる。ソフト事業費には、のれん制作事業費、お雛祭り開催費、勝山文化往来館の管理委託費が含まれる。真庭市(旧勝山町)では1985年度から2012年度までで総額12億6千万円の事業費が投下されたが、ソフト事業費は8.9%にすぎない。

なお、町並み保存地区は、2011年4月に真庭市景観計画に基づく勝山重点景観づくり地区に指定されている。

4-3 のれんのまちづくり

「のれんのまちづくり」は、町並み保存地区内に居住する草木染め染織作家が制作・監修するのれんを、地域ぐるみで掲げることによって美しい町並み景観の形成を図り、来訪者の獲得につなげようとするものである。町並み保存地区の事業主等が中心となって結成された住民まちづくり組織「かつやま町並み保存事業を応援する会」⁽³⁾と真庭市(旧勝山町)との公民協働によって実施されている。行政の役割として、補助制度の制定、広報支援、視察応対に加え、のれんのまちづくりの行政計画への位置付けが挙げられる。

のれんのまちづくりの特徴として、草木染め風であることと、依頼者の暮らしやこだわりをイメージしたオリジナルデザインであることが挙げられる(写真1)。そのため、デザインには小さなストーリーやドラマが埋め込まれ、抽象化されたデザインの謎解きをめぐって、住民どうしや来訪者との間で、コミュニケーションが図られる契機となっている。



写真1: 多彩な のれん デザイン

このような景観形成と生活者の視点に立脚したまちづくりの姿勢が評価され、2009年度には「都市景観の日」実行委員会による都市景観大賞(美しいまちなみ大賞)を受賞している。

町並み保存地区(補助対象地区)におけるのれんの普及状況は、2012年度の真庭市による補助実績ベース(新規累積件数)で95件、沿道家屋数に対する実施家屋数を示す実施率は地区全体で60.7%に達しているが(図-2)、1996年度から2012年度までののれん制作補助金は、総額約820万円(県分+市町分)にすぎず、メディア等での露出を通じた地域イメージの向上を踏まえると、費用対効果は高いといえよう。

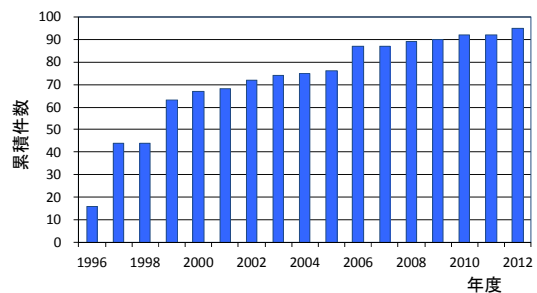


図-2 のれんの普及状況(新規補助実績件数ベース)⁽¹⁾

4-4 勝山のお雛祭り

勝山のお雛まつりは、町並み保存地区と隣接する商店街の家屋や商店の玄関、軒下に、各家が保有する雛人形を展示するとともに、多彩な設えを施すことでまちなかを美しい展示空間とし、来訪者等とのコミュニケーションを楽しむ文化イベントで、1999年から毎年3月初旬の5日間に限定して開催されている。

近隣の中学校、高等学校等の学生も、ボランティアとして会場案内等の役割を担っているほか、2010年度には、岡山県立勝山高校と老舗の地域企業との共同開発により、真庭市認定の特産品「真庭ブランド」を組み合わせた創作菓子の販売が行われ、好評を博した。真庭市も助成金や広報支援の他、駐車場整備等の協力を行っており、勝山町並み保存地区を挙げてのイベントとなっている。

勝山のお雛まつりの特徴として、①所蔵する雛人形を展示するだけでなく、新たな雛の創作、軒先の設え、各家が保有する着物や掛け軸等の工夫を凝らした展示が行われていること、②イベント開始前日の前夜祭を住民のために開催するなど、住民自らが楽しむことが重視されていること、③家人による説明や茶菓のふるまいといった来訪者へのていねいなおもてなしがなされていること、④祭りを良質な状態で持続させるため、祭りの趣旨にそぐわない露天商の出店や販売行為を事実上排除する実行委員会による自主規制が制定されていること等があげられる。

こうした工夫により、勝山のお雛まつり実行委員会による来訪者アンケート調査では、来訪者から高い評価が得られており、①美しい町並み(歴史的風情、清潔さ)、②雛人形飾り付けの多様性、創造性(創作雛、手作り、新鮮さ)、

③住民のおもてなし(節度ある商業活動)、④参画性・協働性(まちぐるみの取り組み)といった点が評価ポイントとなっている。

勝山のお雛まつりの来訪者数は、当初数年間で急速に増加したが、近年は3万5千人から4万人の横ばいで推移したあと、やや減少傾向にある(図-3)。この原因は明確ではないが、高齢化に伴って雛祭りの準備が困難となり、出展を見送ったり簡素化したところがあるほか、近隣地域でも類似の雛祭りイベントが開催され、目的地が分散しつつあることが要因と考えられる。

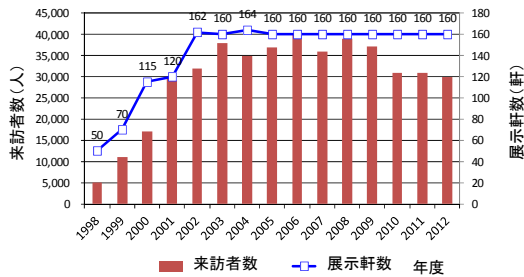


図-3 勝山のお雛まつり来訪者数推移

5 勝山のまちづくりの特質と多面的効果

5-1 まちづくりの特質

勝山地区のまちづくりの特質を整理すると、第一に、商家、民家の暮らしやこだわりをイメージ化したのれんを住民が協調して掲げることで美しい町並み景観を形成するのれんのまちづくりと、魅力ある創造空間が来訪者を魅了する勝山のお雛祭りは、文化的資源と調和する創作活動を組み込むことで、歴史的建造物の保存・修復による景観形成単独よりもいっそう地域の魅力向上を果たしている。第二に、公民協働の枠組みで実施されていること、自分自身のこだわりが表彰されているデザインだからこそ、自発的にのれんをかかげることができること、地域中小企業や学校教育機関が参画するなど、地域ぐるみで取り組むしかけが埋め込まれていることが挙げられる。第三に、来訪者数の増加を唯一の成果指標とはせず、地域住民自身が楽しめるしくみが埋め込まれており、持続性に配慮していることである。この結果、勝山は地域イメージの向上、地域ブランドの創出に成功し、①交流人口増に伴う経済的効果、②歴史的建造物の保存・修復、街並み景観の形成、地域文化の再興による文化的効果、③のれんを媒介したコミュニケーションの促進、創作活動への参加による生きがい創出、地域の誇りとアイデンティティの回復による社会的効果、④まちづくり活動への参画による教育的効果といった多面的活性化効果が創出されたと考えられる。

5-2 資源ベースアプローチの適応状況

勝山町並み保存地区における価値創出のメカニズムをBarneyのVRIOフレームワークに即して解釈すると、①「V価値の創出」は、文化的資源とマッチした創作活動の組み込みによる地域の魅力創出と多面的効果によって示され、

②「R稀少性」は、自然景観に恵まれた勝山町並み保存地区の立地特性、文化的資源と創作活動を組み合わせた高品質のまちづくりに成功している地域は多くないこと、③「I模倣困難性」は、依頼者の暮らしやこだわりをイメージした唯一無二ののれんデザイン、お雛まつりでの住民参加型創造空間の現出は比類なきものとして示される。④「O戦略遂行組織」は、行政と住民まちづくり組織との公民協働の枠組みを基本としつつ、事業者や教育機関がゆるやかに連携したネットワーク組織となっている。

このように、勝山町並み保存地区では、BarneyのVRIOフレームワークに示す競争優位の条件を、地域資源の活用的高度化と地域内組織による内発的アプローチによって獲得し、地域の魅力と価値の向上、多面的効果の創出をもたらせており、まちづくりの高度化がなされたと解釈できる。

今後の課題として、文化的資源と創作活動を組み合わせた他の事例との比較検討を行い、知見の深化を図りたい。

【補注】

- (1) 真庭市役所提供資料等により筆者が作成した。
- (2) まちづくり過程に関する記述は、NPO勝山町並み委員会編(2010)の記述の他、現地調査、関係者インタビュー等に基づく。
- (3) 設立目的は、伝統的な町並みの保存整備を図る町の事業を応援し、町並み保存地区の発展を図ることで、伝統的行事の継承と発展の事業、保存地区内の活性化のためのアイデアの提案、先進地視察を含む研修会の開催等の活動を行っている。

【参考文献】

- 1) 岡崎篤行ほか(1994)「歴史的町並みを活かしたまちづくりのプロセスにおける合意形成に関する事例研究-川越一番街商店街周辺地区を対象として-」『1994年度第29回日本都市計画学会学術研究論文集』pp697-702
- 2) 宇津徳浩ほか(2006)「歴史的建築の保存活用に関する市民の評価意識構造に関する調査研究-金沢市の歴史的建築を事例として-」『日本都市計画学会都市計画論文集』No. 41-3, pp487-492
- 3) 大森洋子ほか(2000)「歴史的町並みを観光資源とする地域におけるまちづくりに関する研究-筑後吉井の町並み保存事業を事例として-」『2000年度第35回日本都市計画学会学術研究論文集』pp811-816
- 4) 勝村文子ほか(2008)「住民によるアートプロジェクトの評価とその社会的要因-大地の芸術祭 妻有トリエンナーレを事例として-」『文化経済学』第6巻第1号, pp65-77
- 5) 荒川佳大ほか(2010)「地域での文化活動の派生からみた地域多主体型アートプロジェクトの役割に関する研究-墨田区向島地区での一連のアートプロジェクトを事例として-」『日本都市計画学会都市計画論文集』No. 45-3, pp289-294
- 6) 松本玲奈ほか(2002)「地域開発戦略における地域マーケティング手法の理論的展開についての一考察」『日本都市計画学会都市計画論文集』No. 37, pp1093-1098
- 7) 高田誠マルセルほか(2010)「テーマ型まちづくりにおける創出景観の歴史的連続性と空間特性に対する住民評価に関する研究-彦根市における異なる2テーマによる景観創出事例を対象として-」『日本都市計画学会都市計画論文集』No. 45-3, pp349-354
- 8) 金井一頼(2009)「地域資源と科学的「知」の融合による地域活力の再生」『産学官連携ジャーナル』vol. 5 No. 1, pp11-12
- 9) 青島矢一・加藤俊彦(2003)『競争戦略論』東洋経済新報社
- 10) Collis, David J. and Cynthia A. Montgomery (1998) *Corporate Strategy. A Resource-Based Approach*, McGraw-Hill, New York.
(根来龍之ほか訳(2004)『資源ベースの経営戦略論』東洋経済新報社)
- 11) Barney, J. B (2002) *Gaining and Sustaining Competitive Advantage*, 2nd Edition, Pearson Education (岡田正大訳(2003)『企業戦略論』ダイヤモンド社)
- 12) 白石弘幸(2005)『経営戦略の探求』創成社
- 13) NPO勝山町並み委員会編(2010)『のれん越しに笑顔がのぞく』白備人出版